

<書評論文>

ジェンダー理論の学説史

Rachel Alsop⁽¹⁾, Annette Fitzsimons⁽²⁾, Kathleen Lennon⁽³⁾,
Theorizing gender
 (Polity Press, 2002)

堂之本 梨央

1 はじめに

本書は、フェミニズム、ジェンダー論、クイア論等の理論をめぐって、その背景から生成の過程・批判までを網羅した、学説史的位置に立つ著作である。学生向けのジェンダー理論の導入という面が強いが、これまでの議論を彼らなりの軸に沿ってまとめた点で意義のある著作である。

学説史ということで、本書が何らかの立場に拠るということは主張されず、批判や評価から距離を置いている。よって、ジェンダー理論に入門するには有益な著作だと言えよう。したがって本稿では、その内容の要約を主とすることで、改めてジェンダーの理論を整理してみたい。

2 本書について

2-1 本書の目的、特徴

本書の目的は、ジェンダーについて理論化する際に用いられてきたさまざまな方法⁽⁴⁾の例を提供すること、そしてそれらのアプローチを評価し、各理論の間に横たわっていた

⁽¹⁾Hull 大学社会学部講師。

⁽²⁾Hull 大学社会学部講師。

⁽³⁾Hull 大学哲学部教授。

⁽⁴⁾主に精神分析的アプローチと、社会構築主義的アプローチである。

溝を、それらが本当は連続していると指摘することで埋めること、すなわちジェンダー理論の分類化と再評価である。一般的に人々が男と女という二つのカテゴリーに分割される論理的根拠を問い直し、そしてこのカテゴリーの生み出す限界、境界についても問いかけを行っている。なかでも特に軸として据えているのは性差という点である。そして、アイデンティティ・ポリティクスの可能性と限界といった脱構築的なジェンダー論の可能性を、異なる理論を織り交ぜる試みによって探っていく。また、Judith Butler（以下、バトラー）といった特定の理論家たちを多く引用・参照し、これまでの理論を横断的に要約しているのも特徴である⁽⁵⁾。

2-2 本書の要約

では、本書を章毎に順に要約していこう。

まず導入では、上述したような本書の意図、目的、特徴が述べられる。

一章では、性差が生得的なものかについての議論が提示される。性差を生物学的に自然・生得的なものとする立場、そして社会的・文化的に構築されたものとする立場の二つの立場のうち、前者について検証がなされている。

自然主義、生物学的な本質主義がいかに発達してきたかを詳細に述べた後、著者はそういった自然主義を批判する反自然主義者による抵抗について述べる。従来の科学の標準でもってすら、その性差に関する推定上の説明は無効だと認定できる、と反自然主義者は自然主義者を批判する。また彼らは、科学はそれ自体を生んだ文化を反映しており、ジェンダーについての文化的な前提がセックスについての科学的説明に影響を与えるのではないかという指摘もしている。

しかし、自然主義に反対するからといって、我々は生物的身体が役割を持っているとする考えを完全に否定する必要はないということに留意しなければならない。このことは本書において何度も繰り返される強調点である。

二章では精神分析的なアプローチを扱い、フロイトやラカンを中心に、無意識という学問的示唆の重要性について示される。これは象徴的な本質主義と言ってよい。

どのようにして我々のジェンダーアイデンティティがつけられているかを洞察するにあたり、フロイトに始まる精神分析的知見が与えた重要な見地は、まず、意識的側面と同

⁽⁵⁾ 留意すべき点として、〇〇年代フェミニズムといったような年代順の理論の発展を示すことはしないというのが著者らの意向である。何故なら、それらは妥当な点も多いが、例えば90年代フェミニズムのように、過去の不均質性を無視していたり、何年にもわたる連続性が考慮されていないことも多いからである。また、経験主義的なことも言及されない。あくまで本書は理論の提示が目的であるためだ。

様に無意識的側面があるということと、そして社会的経験によるものと並列に、身体性によっても構築されるものだというのである。

また、フロイトは生涯を通じて、従来の「男らしさ」「女らしさ」といったジェンダーアイデンティティがどのようにして存在するに至ったかを探求し続けたが、純粋なるそのカテゴリーは存在しないと結論づけた。

フロイトを継承したラカンは、全てのアイデンティティと経験は言語によるものだと強く主張した。このラカンの論はポストモダンのフランスのフェミニストに大きな影響を与え、彼女らはラカンについて批判をしつつ⁽⁶⁾、それでも無意識と欲望は言語にのみ存在するという彼のアイディアを用い、アイデンティティ、また、セクシュアリティの差異や流動性、多様性を強調する新しい理論を作り上げた。

これらの精神分析理論は、我々のジェンダー的主観は無意識の欲望による破壊にさらされているため、常に潜在的に不安定なものだということを明らかにした。そして、我々がどのようにしてジェンダー化された主体となるのか、つまり、身体の差異に意味を付与する過程がどのようなものなのかを示すこととなった。フロイトの論においてもラカンの論においても、この主体形成の過程は人生の早い時期に固定され、後の人生で抱く欲望を統制することとなる。

続く三章では社会構築主義的アプローチを扱い、構造的・物質的な特徴やパターンを重視する唯物論⁽⁷⁾と、言語や表象における意味の構造に目を向ける言説理論⁽⁸⁾を中心に示される。ここではフェミニスト思想における女性間の差異の認識を通して、また家父長制という概念の分析を通して、男女を内面的に均質な集団と定義づけることへの問題を露わにしている。

唯物論的な本質主義には、社会関係の構造を分析するにあたってマルクス主義の枠組みを用いるアプローチ、そして、家父長制という概念を用いるアプローチがある。このような唯物論的思想は、単なる「女性」という概念だけでなく、人種、障がいといったさまざまな属性を持った「女性」を発見することとなった。

しかし、女性の社会的位置、教育、男性による支配といった「モノ (things)」の視点は、ジェンダーの主観性の側面に対応できなかったため、フェミニズムの関心は次第に「言葉 (words)」へと移るようになった。すなわち、言説による構築という視点である。「女であ

⁽⁶⁾ 例えば、イリガライは、女性が初めから「失われている」ものとするラカンの概念は、男性の象徴的去勢を無意識に投影していると述べる。

⁽⁷⁾ 男女が社会において離れた所に埋め込まれているという構造的特徴を強調する。そして、労働、家族、セクシュアリティといった具体的な社会関係を強調する。

⁽⁸⁾ 言葉と文化の役割を強調しつつ、社会において男／女であることに付与された意味を強調する。

る」「男である」ことは、地位、歴史的時期、階級、民族等によってさまざまに存在する。この発見から、世界との関わりに関する我々の理解は「媒介されている」という視点を提供した M. Foucault（以下、フーコー）が出現する。フーコーにとって、言説には二つの重要な側面がある。一点目は、言説は歴史的に変化するということ。二点目は、言説は権力と深く結びついているということである。フーコーはジェンダーにはほとんど関心を払わなかったにもかかわらず、多くのフェミニストが彼の論を言説理論に適用した。

最後に筆者は、差異への関心によって明らかになったのは、唯物論と言説理論のどちらかを権威付けすることではなく、両方を織り交ぜることだと強調している。

四章では、社会構築主義の限界をつくったバトラーの思想が集中して提示される。

バトラーは、生物的な、あるいは精神的な「本質」によってジェンダー差が現れるという見方を完全に拒絶した点で有名である。彼女によれば、男らしさ／女らしさと、男／女の身体には必然的な繋がりはなく、性を構成するのはパフォーマンス、社会的な実践である。

彼女の権力への見方は、フーコーと同じく、禁止するだけではなく可能にせしめる力を持つというものだ。彼女はラカンの思想にも依拠しているように見えるが、ラカンとの異なる点は、「法」への見方である。ラカンにとって法はシンボリックな秩序を意味付けるものだが、バトラーにとっては覇権主義的、支配的なものである。また、言説を固定的なものとはみなしていないこともラカンとは異なる。

バトラーは男／女という二項対立を攪乱しようとするが、そのジェンダーカテゴリーを拒否することに反対する論者もいる。彼らは、そういったカテゴリーを用いないことには、性的な特徴を認識する、あるいはそれをポジティブにとらえる言語が失われてしまう、といった批判を行っている。

他にも、異性愛がアイデンティティ形成を支配するだけでなく社会構造として機能していることや、人々をジェンダーに埋め込む物質的、社会的要因についての考慮がなされていないこと、身体の位置づけに十分に注意が払われていないこと、そしてその政治的アクション等に関してバトラーへの批判が起こった。その中でも最も行われた批判は、身体性についてである。彼女はジェンダーの可動性、横断の可能性を強調したために、身体に付属した意味について述べていないとされたのだ。

五章では、主に Gayle Rubin とバトラーの議論を通じ、ジェンダーとセクシュアリティの連結について検証されている。これらのカテゴリーは広範囲にわたって相互依存しているが、それらは個別の分析を要求する必要があると著者は指摘する。

六章では、男らしさについて、また男らしさを分析するためにとられてきた方法につい

て著者は注目している。まず覇権主義的な男らしさを、そして同性愛嫌悪と男性の矛盾した権力の相互関係を検証し、こういったものが我々のジェンダー理解にどのように影響してきたのかを検証している。

多くの思想で、男性性は生物的なものだとする本質主義が維持されてきた。それはあまり省みられることなく、ゲイの学者が男性性について分析をしても、当初は無視されたり周縁に追いやられたりしていた。理論が進み、男性学がフェミニズム運動との親近を宣言しても、その一方でまだ男性性研究者は生物的な「本質」を軸に据えていた。

覇権的男性性の概念は二つの目立った特徴がある。一つ目は、覇権的男性性は文化的な理想で、男性の多くにとって現実には実現困難なものであるということ。二つ目は、覇権的男性性の中身は流動的であるが、西洋社会での男性性の支配的な理想には共通して女性性と同性愛への嫌悪があるということである。

このような男性性に対しての挑戦となるのが、黒人の男性性、ゲイの男性性といったものだ。これらは下位におかれていたり周縁におかれたりしているが、例えば男性の同性愛が男らしさを異性愛と結びつける支配的な言説への挑戦となりうるように、男性性についての破壊的な可能性を有している。しかしそれでも、覇権的男性性に関する他の要因の妨げとはならない。ともすれば女性が権力を持たない既存のジェンダーヒエラルキーを強化するように働くこともある。

さらに、女性性との関連で男性性を考えると鍵となる問いが生まれる。例えば、男性性は女性性よりも壊れやすいアイデンティティなのかどうか。こういった関連性のある問いを両方に投げることで、我々はそれらのシンメトリーとアシンメトリーを理解できるだろうと著者は述べている。

七章では、ジェンダーの主観形成における身体が果たす役割について述べられている。まずフーコーによる身体性のアイディアを検証した後、障がいに関する理論等との比較によって、パトラーの論が身体的物質性に取り組む方法について疑問を投げかける。そして、この章は、仮想的身体概念を利用した身体役割についても説明を行っている。

そもそも身体について早くに思考されたのは、女性の身体のディシプリンに関してであった。これは女性の身体が支配的な言説によって規制されているということを我々に知らしめた。例えば化粧や整形手術のように、言説は身体を修正する物質的な効果を持つのである。

四章で言及されたような、身体についての考慮がなされていないという批判に関してパトラーは後に再考し、身体の物質性の重要性を否定するわけではないこと、そして物質性と社会的構築性との対立を弱めたいという立場を明確にした。その弱める方法は、物質性

そのものが言説による効果を受けていると主張することであった。よって、性差がどのくらい「本質」なのかと問うことよりも、どのようにしてあたかも物質的なように性差がつくられるのかを知ることの方が必要であると主張した。

著者はここでもまた、バトラーの論を障がいの理論と比べている。障がい研究では「健常」／「障がい」についての社会的構築性を主張することが重要である。だが、そうすると残酷なまでに決定的な身体的要因を思い知ることとなる。したがって、我々はどちらの重みも認識し、社会的な媒介性に妥協した新しい思考法を模索せねばならない。

そこで著者は、仮想的身体という概念を用いることによって、手荒な生物学や文化的幻想の片方のみに回帰することがなくなると述べる。けれども、そうすると女性の身体に関する社会的想像はネガティブなものが多いということが明らかになる。そこで最も重要な影響を与えたのはイリガライであった。彼女は、女性性を破壊しなくてもすむような女性の身体についての仮想を多様に発展させる必要があると主張した。

仮想的身体について考えることは、トランスセクシャルにとっての身体の修正の重要性をも明らかにすることとなった。これは九章にて述べられる。

八章では、性差は文化的に構築されとするバトラーの主張が、性差理論の分析を通じて問い直される。イリガライの性差に関する分析を提示し、ジェンダーという概念における性差という語の使用に関するフェミニストの思想を、より深く検証している。

差異派理論は、差異をネガティブに捉える平等主義的アプローチを拒絶し、対照的に、性差をポジティブに認識することの重要性を説く思想である。ここでは女性と男性との差異が絶対的に強調され、また、現実の女性と、男性文化における表象としての女性との差異もまた強調される。

差異派フェミニストで有名な例は先にふれたイリガライだ。彼女にとっては、平等を求めることは現実問題を誤って表現することである。女性が一体「何」と平等になりたいのか、と彼女は問い、ボーボワールに代表される普遍的な女性観に異を唱えている。

九章では、トランスジェンダーについての議論、そして最近のクイア理論について考察されている。アイデンティティをつくりだすという言説の生産的な権力だけを反映するのは、人々の具体的な経験を外に放っておく危険がある。よって、アイデンティティをパフォーマンスに構成する手段としてだけでなく、人々の経験を理解するための手段としてもジェンダーカテゴリーを使用することについて考察される。セックスとジェンダーのつながりを弱体化することで、クイア戦略は多様で不確定なセックス、ジェンダー、セクシュアリティの位置付けの可能性を広げてきたが、その一方、トランスジェンダーはジェンダーアイデンティティにとっての性別化された身体的重要性について再度関心を提起す

る。そして、Jay Prosser（以下、プロッサー）の論を通して、クイアが性的具体化へのトランスセクシャルの希望を説明することができないという主張について述べられる。

トランスジェンダーは当初はフェミニストに歓迎されなかったが、最近になって境界的な性や異性愛アイデンティティの構築を批判する先陣とみなされ始めた。しかしプロッサーのように、クイア理論に満足しない論者も現れる。彼は、borderlands（ジェンダーカテゴリーが弱体化し、ジェンダー区分がぼやけたところ）にいたい人と、home（ジェンダー化されたところ）にいたい人との対照性を指摘した。そして彼は、クイア理論は身体に性別を持たせたいというトランスセクシャルの欲求を説明できない、とした。トランスセクシャルの物語において「誤った体に生まれた」というコンテキストが頻発することの発見は、社会構築主義やパフォーマティブ理論と彼との間に緊張を生むこととなった。何故ならこの物語は、「究極の目的」の達成、つまり身体を修正することで可能となる「本当」のジェンダーの home へ辿り着くことを意味するからだ。

しかし、このトランスセクシャルのアイデンティティに関するプロッサーの論へはさまざまな批判が寄せられた。そのほとんどは home に関してであった。例えば、正しい身体とはどういう状態のことなのか、また、home は安定した固定的なものではなく変化をするものではないか、といったものである。また、home が borderlands と必ずしも相反しないことも明らかにされることとなった。

我々が認識できるのは、性別の境界を政治的に弱体化させるトランスジェンダーによって、人々がますます異なった言説の文脈で性のアイデンティティを決定していることである、と著者は述べている。そして我々がジェンダーカテゴリーを必要とするのは、アイデンティティを遂行的に構築するためだけではなく、自らの経験に意味をもたせるためでもある、と結論づけている。

十章では、きっぱり区分されたジェンダーカテゴリーを維持あるいは脱構築する政治性について考察されている。アイデンティティ・ポリティクスの可能性と限界を算定し、集団というポリティクスと我々自身の複雑な主観的アイデンティティとの隔たりについて述べられる。

主体の脱構築といったフェミニズム理論の最近の転換は、固定的で統合された自己といった見方を弱体化させてきたが、同時にフェミニズムのようなアイデンティティを本拠にする思想にとっては重要なジレンマを引き起こした。それは簡単に言うと、「女性」という主体が失われたら一体どのようにして女性について述べればよいのか、というものである。アイデンティティを本拠にした政治的な運動は、前提として、我々が女性や男性、ゲイ、黒人、といったものを「特定の経験を共有した集団」として語ることができるとい

う理解に基づいていた。したがって、アイデンティティ・ポリティクスは、生物的、構造的、構築的なものから生まれる単一な女性という一種の本質主義に依存していると解釈される。四章でみたようにバトラーはこれに挑戦した。彼女は、アイデンティティは行動やスタイルの反復によって構成されるものである、よって文化に参入させられる以前は安定した共通の主体などない、と主張した。しかしこういったバトラーやクイアの論は、日常におけるジェンダーのパフォーマンスからの解放を過大評価していると批判されることとなった。安定した社会的アイデンティティを破壊することは、必ずしもジェンダー、人種、階級の平等を保証しないのである。

しかし、バトラーはアイデンティティに本拠をおくポリティクスの戦略的、政治的な重要性に気付いていたし、「女性」というカテゴリーが危険を孕んでいることをも認識していた。それでも「戦略的な本質主義」の可能性はあるのである。著者は、バトラーの理論的枠組みにおいてフェミニスト・ポリティクスは可能であると述べる。何故なら、「女性」というカテゴリーの不安定さによってポリティカルな抵抗が可能となるからだ。したがって、バトラーの論に不足しているのは再帰性の可能性である。共有された主観・共同性の結果だけでなく、それらへの人々の意識的な適応によってもアイデンティティは構成されているのである。

多くの理論家が、脱構築とアイデンティティの不調和を避ける新しい理論的枠組みを作ろうとしている。例えば Iris Marion Young は、集団に関して、group(意識的につくるもの)と social series(状況によって受動的にメンバーとなるもの)とを区別した。彼女はジェンダーを複雑な「series」として見るべきだと主張している。この見方は我々に、社会構造と物質的な実践の両方に関連して女性を概念化させてくれると著者は指摘する。

そして最後に著者は、我々はアイデンティティ・ポリティクスと脱構築戦略のどちらかを選ぶ必要はない、と再び強調する。

3 考察

本書について、少しだけ批評しておきたい。

学説史といえども拠って立つところの意見はある。本書においてそれは「織り交ぜる」ことだ。著者らは、これまでに出版されたあらゆる理論を、どれか一つを「選ぶ」のではなく、「織り交ぜる」ことが重要だと徹底して強調している。なかでも、現代では息を潜めつつあるように見える、性差を生物学的な本質とする自然主義のアプローチを重要だと位置づけていることは評価されてよいだろう。最近のジェンダー研究の大半では、生物学的な性

差があるかないかといったことは「とりあえず置いておいて」、というのが前提になっているように思われる。研究者や学習者の誰しものもその問いを抱え続けつつも、自身の「答え」や「立場」を理論立てて真正面から述懐する研究は少なくなってきたように思われるのだ。しかし、こういった生物学的性差が実際にあるにしてもないにしても、そのような問いが存在していることを表の場で再考する必要があるのではないかという視点を、本書は改めて生起させてくれる。そうすることで、議論がされ尽くしたにもかかわらず、現実の目の前の社会で実践されない、根付きにくいといった、このジェンダーという分野が抱える問題に、改めて真正面から取り組むことが可能になるのではないだろうか。そして、正しいか間違っているかという二元を飛び越え、理論に対する「否定しなくてよい」というこのような思考の柔軟性こそが、多様化多様化と叫ばれるこれからのジェンダーに関する理論に最も貢献できる姿勢ではないかと思われる。

一方で、本書に足りない点も考えられる。例えば、ゲイや黒人といったものが旧来の西欧主義的・覇権主義的なあらゆる概念への挑戦、脱構築の新たな可能性をもたらしてくれるものだとしばしば指摘され、引用されているのだが、それらが「挑戦」した後の概念の変化についてほとんど述べられていないのだ。これは本書の問題というよりも理論そのものの発展の問題であろう。西欧主義的・覇権主義的な概念が崩された、とはいっても、その崩された後に生じるはずの有効な立体的概念が未だ確立されていないのかもしれない。例えば、白人でも黒人でもないアジア人という他の人種や、Aセクシャル⁽⁹⁾といった他のセクシャルマイノリティについてのジェンダー理論がより展開されれば、本書のみならずジェンダー理論はより広く深く網羅的なものとなっていくだろう。

4 おわりに

本書に著されたその膨大な学説を本稿で取り扱うことはできず、まとめをするというのは無理があるが、根本的な問題として、本書が軸とした性差について、現代の日本のジェンダー研究で理論立って扱われることは、下火になっているように思われる。これまで先人達が議論したさまざまな理論を「織り交ぜて」得られる新しい実践を可能にするため、この性差という軸は再興する価値のあるものではないだろうか。

⁽⁹⁾ 無性愛者、つまり、恋愛感情や性的欲求を抱かない人のことを指す。

参考文献

- Butler, J., 1990, *Gender trouble: feminism and the subversion of identity* (= 1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社).
- Irigaray, L., 1977, *Ce sexe qui n'en est pas un* (= 1987, 棚沢直子, 小野ゆり子, 中嶋公子訳『ひとつではない女の性』勁草書房).
- Prosser, J., 1998, *Second Skins*, Columbia University Press.
- Young, I. M., 1995, "Gender as seriality: thinking about women as a social collective," L. Nicholson and S. Seidman eds, *Social Postmodernism: beyond identity politics*, Cambridge: Cambridge University Press, 187-215.

(どうのもと りお・修士課程)